

# 徳川斉昭と伊達宗城

——弘化三年の往復書翰——

河 内 八 郎

はじめに

本稿は、水戸藩主徳川斉昭と、宇和島藩主伊達宗城の間にかわされた往復書翰を集成しようという試みの一部である。一部分は公刊された諸書に入っているものもあるが、大部分が未公刊である史料を紹介することが主たる目的であるが、幕末とくに嘉永・安政期の政界の一方の指導者であった斉昭と、彼と公私にわたる接触の深かった宗城をとりあげる前提ともいえる基本的視点については、以下に示しておきたい。

一

伊東多三郎氏が一九五二年に書かれた『資料紹介、幕末史の史料に就いて』<sup>(1)</sup>という文章がある。歴史学の基本学として「正確な史料の蒐集調査、読解、その成立の研究、信憑性の判定、他の史料との照合、史料の持つ意味の特殊性と共通性との分析、史料の立証力の強弱と限界の認定等々の仕事の順序」を疎かにせず、史料学の意義の再認識が必要と説くが、とくに幕末史の多様な歴史的課題にかかわる現存史料の多種多様さの中で、そのことに最も戒心を要す

としている。

従来学界に公開されてきた幕末維新史料の大部分が尊攘側史料で、幕府方の史料がきわめて少なかったこと、それは主として王政復古史観によって構想を立てられた幕末維新史研究であったためであり、伝記的研究に特にその偏向が強いことにも如実に表われているが、やはりそれは史料の蒐集の偏りに左右されたことであつた。第二次大戦中に活動が中断し、一九四九年三月に廃止されて東京大学史料編纂所に吸収された、文部省維新史料編纂事務局の仕事も『大日本維新史料』の編さんには学問的に公平な態度によって史料の採択が行なわれているが、佐幕方の史料の調査、<sup>(2)</sup>取載の点ではやはり片手落ちの点が指摘される。そして氏は、佐幕方関係史料の徹底的調査を一つの中心的課題とした幕末維新期史料の見直しを提唱し、水野家・阿部家・堀田家・井伊家の四つ的大名家史料の調査成果を報告している。井伊家史料が、一九五九年以来、東大史料編纂所によって編さん刊行中（既刊九冊）であることは周知の通りである。

しかし、伊東氏のきわめて正当な提言の一方、維新史料編纂会の廃止によって、明治末年以来の幕末維新史の主として政治史にかかわる史料調査の成果と蓄積は、ほとんど忘れ去られてしまった。折から戦後の混乱期にあつて、大名・旧藩士・公家・寺社・商家・農民等のすべての階層が社会的・経済的打撃を受けて、所蔵する史料を種々の理由で手離さざるを得なかった場合も多かったとき、国家的な事業としての史料調査がおこなわれなかったことは、後々取り返しのつかない研究上の空白を生ずることになった。さらに社会経済史的分野への研究関心の強まりが一方で続き、幕末政治史の研究者の問題関心も、従来の政治史、すなわち、国家や藩の統治機構、政策、政治的事件、指導的政治家の研究という、主にこの四分野が、互いに結びつかず、理論的にも統一されずにおこなわれてきた傾向を止揚するところか、下部構造の諸分析からの接近が、方法的にも主流を占めるに至った。そのこと自体も研究の進展であ

ることは疑いないが、それが従来の史料の蓄積を生かし、それをより以上に発展させることを忘却するようになっていったのではなからうか。大名クラスの史料の著名なものは、中央や地方の公共機関へ移されて、新たな生命を吹き返したものが多く、藩士の家の史料は、その間に急速に、かつ全体的に失なわれていったであろう。

## 二

その結果、幕末政治史研究は大きな壁につきあたり、吉田常吉氏の『井伊直弼』（一九六三年）の他に伝記的研究も少なく、外国史料と『大日本維新史料類纂之部井伊家史料』を駆使した石井孝氏の『日本開国史』（一九七二年）などの他は関係分野の業績も少なく、維新史料編纂会の『維新史』六冊（一九四〇年）に負うところ大であり、大正年間の『日本史籍協会叢書』一九〇余冊の復刊や、『水戸藩史料』五冊（一九一一年）や『徳川慶喜公伝』八冊（一九〇〇年）の復刊が学界の渴を潤している。幕末維新期の指導的政治家の伝記的研究も、啓蒙的な小著は多数流通しているにもかかわらず、思想的視点からの業績すらも数少ない。

ここにとりあげる徳川斉昭についても、『水戸藩史料』<sup>(4)</sup>以外に全く無いし、伊達宗城についても、兵頭賢一『伊達宗城』<sup>(5)</sup>（一九三五年）の他に伝記は無い。

## 三

幕末維新史の史料で埋もれているものに、各家の編さん機関でおこなわれていた藩史や歴代藩主の伝記史料などがある。かなりまとまったものに仕上げられていても、公刊の機を得ぬまま今日に至ったものの多い中で、『鳥取藩史』や、島津家の『忠義公史料』のように、公共機関の手に移されて公刊されているものもあるが、未刊のままのもの<sup>(6)</sup>は二〜三にとどまらない。水戸藩<sup>(7)</sup>においても、『水戸藩史料』として公刊されたものの数十倍の（多くは戦災にあったが）『聿修叢書』があり、宇和島藩においても、歴代藩主の「公紀」数百冊がある。以下にとりあげる『藍山公紀』

一八〇余冊も、その一部である。これらの編さん史料は、たとえ二次的編さん物であっても、その後に種々の事情で失なわれた原史料を多数収録している点から、それ自体が貴重で、きわめて価値の高い歴史的史料となっている。

#### 四

こうした幕末の主として政治史にかかわる諸史料を見直す作業を私自身少しづつ続けてきた中で、ぼう大な量に及ぶ全容にふれることはとうてい不可能ながら、二〇三の小さな部分についてそれを紹介しつつその再構成を試みるならば、伊東氏の説いたような幕末史料の真の意味での再検討の誘い水にもなろうかと考えた。徳川斉昭と伊達宗城に限ってとりあげるのは、史料の存在状況への一つの対応のしかたを示したにすぎないが、指導的政治家ととりまく公私の諸条件、それぞれの思想形成の具体的諸条件などは、実に生々しく明らかになってくると予想される。

徳川斉昭（寛政十二―一八〇〇年生）はこの弘化三年に四七才、伊達宗城（文化十四―一八一七年生）は三〇才であるが、折から海防問題の急迫してくる中で、軍艦と大砲の強化についての意見交換を具体的におこない、蘭書の貸借をしきりにおこなっている。蘭学嫌いといわれる斉昭と蘭癖といわれた宗城の、学問知識や兵術に対する関心は、どのように形成されていったのか等々、安政五年に至る多数の書簡の中にくみ取るべき事柄はきわめて多岐にわたる。

#### 五

ここで、対象となる史料について解説しておく。

(1) 水戸彰考館（水戸市見川町）の史料は、幕末関係のほとんどが戦災に遭い「聿修叢書」も、部分々々が残るのみになった。その中に『伊達公往復書簡』と題する、伊達宗紀・宗城と斉昭との往復書簡を編集したものが六冊ある筈であった。しかしそれも現在は失なわれているようで、宇和島伊達家の側に、その家史編集所で作った写本がある。ここで利用するのはその伊達家にある写本である。なお彰考館には、斉昭と全国各大名との間の書簡類原本が多数ある

が、それには伊達家関係のものは残っていないようである。

(2) 宇和島伊達文化保存会(宇和島市御殿町)の所蔵する伊達家文書には、宗城宛の全国各家からの書簡原本が多数あり、中に斉昭のものも十数点ある。それらは、家史編集所によってすべて稿本に集成されて『御書翰類』二七冊の中に収められている。また宗城については、稿本『藍山公紀』一八一冊(若干欠本あり)(弘化元年〜明治二二年)があり、自家の史料のみならず諸家の史料を多数引用している。

(3) 東京大学史料編纂所に『藍山公伝紀』と題する稿本四冊がある。その成立も伝来も明らかではないが、伊達家の家史編さんと関係ある人の筆になるものかと思われ、引用されている史料が参考になる。

以下は、これら三者の史料をもって、年代順に、斉昭と宗城の往復書簡を編成してみようとの試みである。

#### 註

- (1) 伊東多三郎「幕末史の史料について」(『史学雑誌』第六一編第七号、一九五二年七月)
- (2) 維新史料編纂会の成果やその後の大名史料調査の現状などについては、木村礎編『文献資料調査の実務―地方史マニエール2―』(柏書房、一九七四年)所収の拙稿「武家文書」参照。
- (3) 石母田正「政治史の対象について」(『思想』三九五号、一九五七年五月)
- (4) 山口宗之「幕末政治思想史研究」、同「徳川斉昭小論」(九州大学『九州文化史研究所紀要』第二一号、一九七六年三月)など。
- (5) 兵頭賢一『愛媛県先哲偉人叢書第三卷、伊達宗城』(一九三五年、愛媛県教育会)
- (6) 『鳥取藩史』別巻・附録とも八冊、鳥取藩史編纂事務所による『鳥取藩史稿本』を鳥取県立図書館から公刊(一九六九〜七二)
- (7) 鹿児島県史料『忠義公史料』、既刊三冊、続刊中、島津家編輯所編さんの稿本(東京大学史料編纂所所蔵)をもとに、鹿児島県維新史料編さん所より公刊中。

一、弘化三年六月八日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛（以下典拠に\*印を附す。他の写しとの異同は不可欠のもののみ傍書）

\*水戸彰考館所蔵『聿修叢書 九上、伊達公往復書簡』所収、但し、宇和島伊達文化保存会所蔵写本による。

『藍山公紀、卷六』所引

(1)

謹而奉呈拙楮候、炎暑猛烈之候御座候処、至尊閣下倍被為拙御<sup>(渉カ)</sup>壯栄御興居可被為在、乍憚重疊恐賀至極奉存候、陳者去月三日不存寄尊翰並に御秘本拝借被仰付、重疊難有仕合奉存候、早速御請可奉申上候、病氣ニ付日々と延遷仕候、未御書物返納可仕旨重々失敬至極、多罪之至奉恐入候、早速奉返上候間、御照覽被成下度奉願候、尤別紙ニ委細奉申上候通り、御用被為済候ハ、何卒又々拝借奉願度、随意之儀申上奉恐入候、猶乍草略別封ニ而奉申上候、御請奉申上度如此御座候、恐惶誠惶頓首

六月八日

敬白、炎暑中乍恐 玉體御保護被為在候様奉願候、已上

伊達遠江守<sup>(宗城)</sup>

閣下拝呈

① 『聿修叢書』では「弘化三年カ」と推定している。『藍山公紀、卷六』ではそれを確かな年代として引用している。

内容 一、五月三日の斉昭書翰（所見ナシ）

二、同日秘本借用、閲読。返納の延引を詫び、後の再度借用を依頼。

(2) 右の別紙一

フルステ・パンコク奉服

①

②

御別封御密翰謹而奉盟誦候、兼而奉願候御秘本三部御密借被仰付、重畳難有仕合御礼難尽于毫端奉存候、去月三日拝借仕、七日迄ニ而謹閱一過仕候処、何分其儘返納仕候儀残念千萬奉存候ニ付、八日朝より一室ニ而密写仕居候末所勞ニ罷成、何分執筆不相叶、其後少々病勢退去仕候ニ付、強而松修理大夫方へ要用ニ付四五度罷越<sup>秘談仕候故御座候</sup>、再発仕幽痛ニ相変、今日迄も難渡仕居ニ付、十二日後密借も不仕フル之方半途ニ相成居ニ付、少々御猶豫奉希上度候得共、餘り延引罷成、其上昨夕返納之御沙汰御座候間、何とも残念至極奉存候得共、固封返上仕候、私写懸も差置候而ハ半途綴立も不出来、取散しニ而ハ不相濟候故、重々奉恐入候得共、差上置候間、后日又拝借奉希候節々恐被遊御添被相下度奉希上候、尤禁忌御深秘本ニ付一切口外不仕様被仰付、是ハ乍恐御安慮奉願候、決而如何様之儀御座候共漏泄不仕事に御座候、誠に草莽中小虫奉議ハ奉恐入候得共、内患外患之御卓論今日之機先御洞察被為在候処恐入奉感服候、御忠言御汲取不被為在、至于今日候儀天運とハ乍申恐入候儀歎声仕候、バン入御内覧候由御本懷の御儀と奉存候共、御信用無御座候而ハ実ニ恐入候儀に奉存候、御用被為濟候ハ、御一卷宛ニ而宜敷候間、何卒御恩借被仰付候様伏而奉希候、御封章返上仕候、先者草略奉服仕候、尚近日奉伺御機嫌候節、委細言上可仕候、恐惶頓首百拝

六月八日

奉服

- ① 蘭書 Versterkingskunst …… (築城術書か) か、正式書名は後考にまじ。
  - ② 蘭書 Handleiding …… か、正式書名は後考にまじ。
  - ③ 松平修理大夫ニ島津斉彬、薩摩藩世子、文化六ニ一八〇九年生。
- 内容 一、五月三日密借の秘本三冊 (蘭書) 同八日より密写。病氣となりて終らず。

二、島津斉彬を四五度訪問、「弘夷一条」につき密談とあるは、同年四月七日フランス軍艦の琉球来航、通商要求にはじまる仏艦来航一件の事で、老中阿部正弘より交易不許可の指示を受け、斉彬は六月八日に江戸より帰藩の途に発つ。な

お、六月七日には、フランス軍艦クレオパトル号 Cleopatre 以下三隻が長崎に来航し、薪水を求めている。

三、返還催促により、「フル」書は筆写中途にて返却、後刻の再借を依頼。

四、「パン」書も再借用を依頼。

(3) 別紙二

御別紙両通被成下奉謹誦候、然者諸大名人物愚評奉申上候様、且蘭書之義ニ付而も縷々被仰出、夫々奉恐承候、今日右等も奉服可申上筈ニ御座候処、愚評ハ未タ少々不相整、蘭書之儀ハ相分居候得共、乍恐齒痛ニ而長文難洩仕候間、近日奉申上候半、今日奉服不仕條乍恐、御仁恕奉希候、琉国弘夷処置之儀ハ御議論可被為在と恐ながら奉恐察候、廟堂諸老妙計神略御座候哉如何と奉存候、啓亡而齒寒塩梅御座候間、何卒患害を嫁後人候様の姑息之处置不仕様、修理大夫かたハ愚論毎度申述置候事に御座候、定而御卓絶之高論御教示被成下候儀と奉存候、尚又近日奉申上候半、恐惶不備

六月八日

内容 一、諸大名批評の返信未だ整わず(後出、五(2)、七月一日伊達宗城書翰)

二、蘭書についての問へも後刻返事

三、仏艦琉球来航の処置の論議、島津斉彬とも論議せしこと

二、弘化三年六月十三日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 同前所収、但し、同前

『藍山公紀、卷六』所引

一 翰謹而奉呈候、大暑難凌候御座候処、先以 閣下被為揃倍御安泰可被為涉、重畳恐賀至極乍憚奉南山候、近日如



何被遊御座候哉奉伺御機嫌度、弊邑産一種奉進献候、御叱留被成下候ハ、難有仕合奉存候、先ハ草略如此御座候、恐惶誠惶頓首謹言

六月十三日

伊達遠江守百拜

閣下御侍史

宗城花押

二伸、乍恐炎暑之候御座候間、御保護專要奉存候、扱又先日之御請夷船渡来一条杯奉申上度候得共、少々取調間ニ合兼候間、近日又奉呈愚札候半と奉存候、御請延引此段御用捨奉願候、恐々頓首  
内容 一、国産品進呈。

二、仏艦琉球来航についての返事の延引。

三、弘化三年七月一日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

\* 同前所収、但し、同前

『藍山公紀、卷六』所引

両章披閱、殘炎酷烈起居萬福令欣喜候、抑当節為尋問名産被懸芳意、多謝之至ニ存候、弊邑之産且微少候へ共、御一笑迄ニ進申候、不一

初秋朔

溽暑御自愛專ニ存候也

斉昭

遠江守殿

御報

徳川斉昭と伊達宗城——河内

内容 一、六月八日及び十三日宗城書簡への返信、札状

二、国産品進呈

四、弘化三年七月一日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛（天保九年と推定）

\* 同前所収、但し、同前

『藍山公紀』巻七』所引

機密之尊楮奉謹読候、然ハ先日御元（よりか）の御賢姫様御出府被為在候処、御縁談之儀相応之先方も御座候ハ、内奏可仕、尤俗榮拝ハ御好不被成、又 閣下ニ而も不被遊御好ニ付、御世話も不被為在、右等之儀相含居候、迎も俗人ニ而ハ不被為向候間、有志之者之忤坏に可被遊御熟縁先方可有御座や心懸申上候様、尤右等之儀 閣下より可被仰出御儀に不被為在候得共、愚僕儀ハ不外被為 思召ニ付、御密諭被成下候間、秘密ニ相含居候様、愚夫右程迄に蒙 御懇篤、尊命千々萬々奉恐入候次第奉存候、前文御内令之儀ハ不所及愚昧と奉存候得共、万一心付候儀も御座候ハ、御内密奉申上候様可仕と奉存候、当時乍恐同席坏にも家政厳整有志之壮年も甚稀少ニ御座候様奉存候得共、段々御密令之趣被為在候故、重々心懸可申と奉存候、此段草略奉恐入候得共、御請奉申上候、恐々九拜

七月朔日

① 『聿修叢書』は弘化三年とし、『藍山公紀』もそれに従って、本書翰と次の五（１）・（２）を併せて引用している。しかし次註②の如く本書は天保九年ではないかと考える。

② 賢姫さか、徳川斉昭女、文政五年生、天保十年六月四日卒（『徳川諸家系譜、第二』による）。『藍山公伝記、一』によれば、斉昭と親しかった養父伊達宗紀（春山）に伴われて、水戸藩小石川邸に招かれ、打毬の遊戯をおこなった宗城が、斉昭と夫人峯寿院の目にとまり、その翌年、斉昭より宗紀に賢姫と宗城の縁組を申込んだという。十年二月より両家の使者が表立って交され、四月廿五日將軍家へ願出、五月三日縁組許可となった。六月五日結納、同廿五日婚礼の予定であったが、六月四日賢姫突如として発病、差込（しゃく）強く、七日死去した、ともある（兵頭賢一『伊達宗城』二〇～二二頁参照）。天保十年、宗城

は二三才である。

なお、伊達家文書の『宗城公御記録書抜 第一』によれば

「天保九年戌閏四月、御曹司様水戸中納言様御娘賢姫様御縁約御願濟

一天保九年<sup>(十)</sup>亥六月、御縁女賢姫様御急病ニテ御卒去ニ相成

とある。その後宗城は、十年冬から話が進んで、翌十一年七月、佐賀藩主鍋島斉正（閑叟、直正）の妹猶姫（益姫）を夫人に迎えた。

内容 一、賢姫縁談に相応の人物

二、結局密命を受け入れ、自ら縁談を承諾。

五、弘化三年七月朔日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 同前所収、但し、同前

『藍山公紀、巻七』所引

# (1)

片紙奉申上候、先日被仰付候人物愚評相考候処、何分外の事と違人品評論抔愚昧浅慮之私抔不存寄儀ニ付、御断奉申上度候得共、愚眼之程ハ御熟知之上被仰付候事ニ奉存候間、強而申上候而も却而恐縮ニ付、乍恐付紙ニ而奉申上候条、当否御不礼之段ハ幾重ニも御寛恕奉願候、年来之儀ハ一人ツ、相尋候儀ニも無御座、追而是ハ相尋得しかと奉申上候半、今日も出仕之上相尋可申と存居候処、米薪之憂に而不参仕候間、延引可仕と奉恐惶候、彼は疎漏之儀而已にて重々恐入奉り候、恐々謹言

七月朔日

内容 斉昭の問に応じて、諸大名批評の返書

(2)

本書は『水戸藩史料、別記下』五九五～五九七頁に所引

(付箋、宗城筆)

『人物愚評之儀ニ付奉言上候条々』

(斉昭筆、以下同じ)

「松平出羽守ハ下官ハ一度も逢不申やう覚申候、有志の人ニ候哉、又俗物ニ候哉、武鑑ニて見候へハ、未嫡子等も見え不申候<sup>①</sup>へハ、定て年若と存候、乍然肥前守娘内室ニ候へハ、少しハ肥前の仕込ニて有志ニ可有之哉、御続柄定て御承知と存候故、承り申候」<sup>②</sup>

(付箋、宗城筆、以下同じ)

『年来三十六七歳可相成、国政向格別勉勵仕候様ニも不奉存候、有志と申程ニハ有御座間敷、其内柳宮勤向社式杯ハ取調、弁別仕居候間、毎時私共世話ニ相成申候、忝無御座、第一人御座候、妻当肥前守妹ニ候得共、参暇詰違ニ相成候間久々面会も仕間敷、切磋も難相成、尤人物肥前守とハ宵壤可仕と奉存候』

「松平大和守ハ丸々と肥たる人の様ニ覚申候処、やはり其人ニ候哉、あまり有志ニも見え不申候へき、面晤杯ニてハ如何、年も余程の様覚申候へき」<sup>③</sup>

『被遊御覽候人物ニ御座候、年来五十有余、格別有志と申程ニハ有御座間敷やと奉存候、其内随分家来共文武之世話仕、就中近来房相海口鎮撫被仰付候ニ付而ハ、手当向杯種々心配勉勵仕候様子候得共、何分不如意ニ御座候奉存候』

「松平兵部大輔、是も末武鑑ニ内室等見え不申候へハ、年若と見え候処、有志ニ候哉如何」<sup>④</sup>  
『年来二十四五歳、温和無事、妻未無御座候様奉存候』

「一松平陸奥守ハ幼年の節両三度見掛候事候へき、只今とてハさそ／＼成長と存候、是ハ御咄抔も相成候有志に相成候哉如何、是<sup>⑤</sup>いまた廿歳計と被存候」

『廿三歳相成申候、不外同家之義ニ付度々面会仕候、国政向種々心配仕候得共、連年之凶耗別而窮迫仕、愧事百端御座候、尚追々憤發可仕候得共、從來之旧弊挽回仕候儀如何有御座哉と深心配仕候、此段御憐察奉願候』

「一細川兵部大輔ハ一度も面会不致候処、有士ニ候哉の咄抔如何、文武共不好方カ」

『無異和平、壯年故文武共心配候様子御座候、矢張越中守氣質と奉存候』

「一黒田ハ薩州の縁有之候処、行違一度も面談不致、有士ニ有之哉如何、是ハ海防の役ニ候へハ是非不好とも有志の論<sup>⑦</sup>も可有之哉」

『随分氣象御座候様奉存候、当時国務抔折角勉強仕候、海防議論も時々申越候、深々心配仕候様子追々可行届と奉存候』

「一松平安芸守ハ有志か如何、文武の義承り及不申候、嫡子等見え不申候へ共、年ハ余程ニ相成候半被察候、御咄の様子如何<sup>⑧</sup>」

『三十四五歳可相成、病身故文武共不仕、萬事不足之様子奉存候』

「一毛利大膳、此節の人ハ如何様の人物か存不申、内室も武鑑ニハ無之候へ共、妾<sup>(腹カ)</sup>服ニハ子供も有之やう承り及候へハ、年<sup>⑨</sup>も三四十位ニハ相成事と存候、此間何か御賞し等有之候へハ、有志ニて諸事行届候人ニも可有之哉、下官抔同様寺院破却致候欺ニも承り候へハ、有志と被存候如何」

『廿六七歳可相成、妻ハ養父修理大夫娘ニ御座候、未幼年ニ御座候、妾<sup>(腹)</sup>服ニハ子供御座候様奉存候、三四年前迄相詰御座候処、其節ハ肥前守、土佐守、私抔毎月会説ニ而出会仕、別懇御座候き、左程有志とも不奉存候、乍

然家来ニハよき者御座候様見聞仕候、先般不存寄蒙 御賞嘗候儀も平日勉勵之志と難有奉存候、昨今年ハ間違  
面会不仕候故、進歩之程如何や弁別不仕候』

「一松平因幡も不存人也、近頃の家督と見え申候、如何の人物ニ候哉、未幼年ニ候哉、是も内室ハ肥前守娘のよし、  
肥前守より遣し候位ニ候ハ、有志ニ可有之哉如何」

『十四五歳可相成、若年故文武共修行最中ニ御座候、志之処只今より愚眼ニ而何とも難奉申上候、肥前守娘遣候  
儀は、同人母因幡守方より参候間、其縁ニ而遣候事と奉存候』

「一松平内蔵頭、是もよく存不申、如何の人物ニ候哉、内室嫡子まで見え不申候へハ、幼年と見え候所、有志らしく  
見え申候哉、<sup>⑪</sup>全くの俗物か御咄合杯ニてハ如何」

『近來奥平家より参候間、御目覚不被為在儀と奉存候、廿五六歳可相成、妻ハ末家より参り候、忤未無御座、人  
物温和無事ニ奉存候』

「一井伊玄蕃、是も近頃嫡子ニ相成候よしにて、人物不存、御覽被成候処如何、年も廿位の人かと被察候如何」

『先頃一度面会仕候、廿四五歳と奉存候、人物之所ハ一面識計故、何とも難奉申上候』<sup>⑫</sup>

「一松平土佐守、下官存候ハ五十計の人ニ候へきか、今以右人ニ候哉、御咄杯出来候人か如何」

『御見覺被為在候土佐守ハ当時隠居仕候、忤相統三十二歳位ニ奉存候、文学志厚御座候得共、病身故不任、心底  
温和之生質御座候、私共益友と奉存候』<sup>⑬</sup>

「一有馬筑後守、是ハ下官度々於當中も見かけ、尤懇ニ面晤致度候へきか、逢候節ハいつも／＼父子一同にて、親ハ  
つまらぬ人故咄も致し不申候へき、筑後ハ親と違、余程有志ニ見え申候、是ハ懇意被成候てよろしき人と存候」<sup>⑭</sup>  
『如尊命志御座候而、旧弊矯回可仕と憤発、当時専精勵仕候、其内去夏歸邑頃より以之外不相勝、一旦ハ甚氣支

之處、追日快服仕候、右故昨年ハ格別不手下越多度申越遺憾仕候、初冬迄ニハ出府可仕と奉存候、只々志持張仕候、震起可仕奉存候』

「二南部甲斐守ハ存候人ニ候処、只今ハさそく成長候半、如何ニ候哉、親位の者か又有志ニ可有之哉」

『二十四五歳可相成歟と奉存候、柳営ニ而毎度面接仕候得共、有志と不奉存候、尤懇意ニ談話仕候儀も無御座候』

「二上杉彈正ハ如何様の人ニ候哉、未嫡子等も見え不申候へハ、年若ニも候哉、又下官存居り申候五十計の人ニ候哉、御咄向如何」<sup>⑮</sup>

『尊命之人物ハ先年物故仕候、当彈正ハ廿七八歳可相成、先頃奉願妾服男子嫡子ニ仕候人物ハ、松内藏頭ニ髻髯仕、少氣節御座候方歟と奉存候』<sup>(腹)</sup>  
<sup>⑮ト同ジ</sup>

「二松平隱岐守、是ハ薩州の兄弟にて、下官も存居り申候へ共、修理の様ニハマヘリ兼可申候哉、人物ハ随分よろしく見え候へき」<sup>⑮</sup>

『以下六人知己ニ無御座候間、見聞丈ケ之處奉申上候、修理と同日に可論人物ニハ不奉存候』

「二松平和之進と云ハ不存人也、未幼年と存候、御覽被成候処如何」

『近來出殿仕候、十二三歳可相成、萬事真田信濃守、親類故世話仕候様子御座候、同人へ御尋御座候ハ、明了可仕候』

「二奥平大膳、下官存候人ハ和蘭時計杯を好人にて、実用の方よりハ弄を樂しミ候へきか、今もやはり右人ニ候哉」

『当大膳ハ十四五歳ニ可相成、御沙汰御座候人、其孫ニ可相成と奉存候』

「二松平甲斐守ハ如何の人ニ候哉、未嫡子も見え不申、年若と存候処、有志と見え候哉、金の俗物か如何」

『三十四五ニ可相成、有志とも不相見、乱舞好候由御座候』

「榊原式部有志か如何、水越娘を内室ニ致候やう見え申候へハ、少しハ文武好候人か」

『弁別不仕候間、何とも難申上奉存候』<sup>②</sup>

「小笠原左京大夫ハ下官存不申人か、内室等も見え不申候へハ、幼年ニも可有之哉、如何の人物ニ候哉、有志か如何」<sup>④</sup>

『三十七歳歟と奉存候』

「以前下官覚候津輕越中ハ不行届候へきか、只今のハ如何、却て親ニ引かへ有志ニも可有之哉」

『尚大隅守末家ハ相続仕候、萬事謹慎仕候而、何も如何無御座、最早年来五十余と見受申候、有志と申様ニハ無<sup>(当カ)</sup>

御座奉存候』

「当松前志摩甚不評判ニ候へきか、定て事実御承知と存候、下官も彼是承り申候へ共、尚委細の義御聞申候、北狄<sup>(判、マ、)</sup>慎撫防禦行届申間敷と有志の者共の論尤ニ存候」

右ハ御手透の節此書へ直ニ御内々御付札ニて承り申度候」

『如尊命不行跡之儀御座候様承候得共、近来絶音故、委曲之事承知不仕、全ク虚評にも有御座間敷、北虜鎮撫之大任御座候処、右体之次第ニ而ハ防禦指揮杯如何可有御座や深々恐入候儀、当時埴邑相願保養中と相聞申候、尤松前位之小家北鎮被仰付候而ハ国力相傾候とも難行届と奉存候、右等も奉申上度候得共、御承知被為在候、拙文禿毫不能詳尽、乍恐閣筆仕候』

- ① 松平出羽守「松江藩（一五万六千石）主、松平斉斎（直貴）、文化十二年生、弘化三年三才。  
鍋島肥前守斉正（閑叟、直正）。前出四、註②参照。



③ 松平大和守〓川越藩（一七万石）主、松平斉典、寛政九年生、同五〇才。忍藩（松平忠国）とともに上総・安房・相模の沿岸警備にあたる。

④ 松平兵部大輔〓明石藩（八万石）主、松平慶憲、文政九年生、同二一才。

⑤ 松平陸奥守〓仙台藩（六二万石）主、伊達慶邦、文政八年生、同二二才。

⑥ 細川兵部大輔〓細川慶前、熊本藩（五四万石）主細川慶順弟。

⑦ 福岡藩（五二万石）主、黒田斉博（長博）、島津重豪九男、文化八年生、同三六才。

⑧ 松平安芸守〓広島藩（四二万六千石）主、浅野斉肃、文化十四年生、同三〇才。

⑨ 毛利大膳大夫〓萩藩（三七万石）主、毛利敬親、文政二年生、同二八才。

⑩ 松平因幡守〓鳥取藩（三二万五千石）主、池田慶行、天保三年生、同一五才。

⑪ 松平内蔵頭〓岡山藩（三一万五千石）主、池田慶政、奥平昌猷弟。

⑫ 井伊玄蕃〓井伊直弼、彦根藩（三五万石）主井伊直亮弟。直亮は弟直元（直中十一男、文化六年生）を養嗣子にしていたが直元（玄蕃頭）は弘化三年正月十三日死去、同二月十八日直弼（直中十四男）が養嗣子となった。文化十二年生、同三二才。

なお、直弼が玄蕃頭を称したのは弘化三年十二月。

⑬ 松平土佐守〓高知藩（二四万石）主、山内豊熙、文化十二年生、天保十四年襲封、同三二才。なお斉昭の間の土佐守は、先代豊資。豊熙の跡は弟豊惇が嘉永元年につぎ、程なく山内豊信が支族より養子に入って襲封するが、それは嘉永元年十二月のことである。

⑭ 有馬筑後守〓久留米藩（二一万石）主、有馬頼永、文政五年生、同二五才、但し、弘化三年七月三日死去。

⑮ 南部甲斐守〓南部利義（利侯）、南部藩（二〇万石）主南部利濟嫡子、文政六年生、同二四才。

⑯ 上杉弾正大弼〓上杉斉憲、米沢藩（一五万石）主、文政三年生、同二七才。斉昭の間にあるのはその父斉定。

⑰ 松平隠岐守〓松山藩（一五万石）主、久松勝善（定毅）、島津斉宣十一男、薩摩藩主斉興弟、文化十四年生、同三〇才。

⑱ 松平修理大夫〓島津斉彬、文化六年生、前註久松勝善は斉彬の叔父にあたる。

⑲ 松平和之進（定猷）〓桑名藩（一一万石）主、越中守、天保五年生、同一三才。定猷の三代前は樂翁松平定信であり、その子二人が二代にわたり信濃国松代藩主真田家に入っている。

⑳ 奥平大膳大夫昌服〓中津藩（一〇万石）主、天保元年生、同一七才。斉昭の間にいう大膳大夫は、三代前の昌高（島津重豪

二男)か。

- ②① 松平甲斐守||大和郡山藩(一五万石)主、柳沢保興、文化十二年生、同三二才。
- ②② 榊原式部大輔||榊原政恒(政愛)、高田藩(一五万石)主、文化十一年生、同三三才。
- ②③ 水野越前守忠邦、天保五||十四年及び弘化元||二年老中。
- ②④ 小笠原左京大夫||小倉藩(一五万石)主、小笠原忠徴、文化五年生、同三九才。
- ②⑤ 津輕越中守||津輕順承、弘前藩(一〇万石)主、黒石津輕家より養子。
- ②⑥ 松前志摩守||松前昌弘、松前藩(一万石)主。

内容 末尾の方に「御手透の節此書へ直ニ御内々御付札にて承り申度候」とあるように、斉昭の質問的書状に、宗城が、付札ないし付箋に人物評を書き、貼りつけて、そのまま返信としたもので、その旨を冒頭に註記した。海防問題などの重大局面を予測して、諸大名の人物評を斉昭が宗城と交したもので、「有志」の人物や否やの文言が注目される。

六、弘化三年八月九日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 同前所収、但し、同前

『藍山公紀、卷九』所引

『大日本維新史料、第一編之二』五四六頁以下、弘化三年八月九日条所載

(1)

謹而奉呈拙翰候。追日秋冷相加候御座候処、先以閣下倍被為揃、御安寧御多祥被遊御座、乍憚重疊恐税至極奉扨賀候、先日者不存懸委曲之御返翰被下置難有奉拝誦候、乍恐事済候御訳者別段奉報不仕、略義失敬之段御海量奉希候、御秘本両冊奉返壁候処、御照手被成下候由、浦賀渡来船之図折角渴望仕候処被下置、重々難有仕合奉感荷候、(仏か)私入申出候書面被相下謹受仕候、此後聞出手ニ入候ハ、又密呈可仕旨奉畏候、取出候ハ、即奉差上候様可仕候、扱亦来年抔者崎陽浦賀海口共渡来可仕、浦賀に而者被下物も有之候間、何等御礼なと、名目を付無用之品物持渡、此地之様子を見候歟、又ハ様子も分り直々数艘渡来、無二無三に押勝て彼カ望を果し候歟之両端に不可出、重々不容易時節ニ可

相成、扱夷を払候策ハ海軍艦大銃之外ハ一切無之と 御卓見被為在候旨、浅陋之愚僕奉議候ハ、乍憚当今之急務御高説之外所詮無御座候、神奇妙策も両器製造上ならてハ施候事も難出来儀と奉御同意候、將軍艦製作之儀一席中有志之面々船なくして不相成と衆議仕候て、此節相願候時に可有之と被思召候旨、懇々厚き奉蒙御教戒、重畳難有儀実ニ本邦之一大事ニ付、尚有志之肥前守、修理大夫、和泉守、土佐守先ツ此四人位ニ御座候面々申談様可仕と奉存候、乍去 閣下御願も不被為濟儀、既ニ五ヶ年前ハ弊邑海上属島非常之節往来為手当、新造輕舸実ハバツテテラ候得共、蘭氣船号に而者不宜題ニ付、如此仕候、尤水越指図仕候製作仕置度段、土井大炊頭迄申達候处、難相成趣ニ付、千萬御啓達御座候处ハ無覺束事ハ竊に歎息仕候、此頃も司天台之炮術蘭書拜借相願置候处、此ニ(ケ脱カ)六ツ敷様子、何卒願取度と奉存候、乍恐家僕共之中にハ守旧株之愚論相発、手元に而さへ奉願候迄ニ申論候事すら骨折候事も御座候、愚人の治下へハ如此御憐察被成下度奉希候、先ハ時季奉伺御機嫌度如此御座候、乍例乱毫拙文奉恐縮候、恐々頓首謹言

丙午仲秋九日

敬白、時下追日促秋冷候間、乍憚為民社御保護被為在度奉希候、将又琉球仏夷一条此間大隅守方へ要事ニ罷越密話仕候处、先ニ出船仕候处、当年よりハ又来年ハ大切と奉存候、尚又聞出候ハ、可奉申上と奉存候、恐々頓首

① 『大日本維新史料』は「拙書(脱アルカ)」と読む。

② 鍋島肥前守齊正(閑叟)、島津修理大夫斉彬、藤堂和泉守高猷、及び山内土佐守豊熙カ(書翰五(2)註②⑬⑭参照)

藤堂高猷は津藩(三三万石)主。

内容 一、先日斉昭よりの委しき返書あり(所見ナシ)。本書簡より判断してそれは、軍艦製造、大砲鑄造についての意見である。  
二、浦賀渡来船の図の下付の礼。弘化三年閏五月二十七日、米軍人ジェームス・ビッドル Bidle 指揮の軍艦コロンプス号 Columbus 等の浦賀来航の一件である。  
三、軍艦・大砲製造の緊要を説く斉昭の論に同意。

徳川斉昭と伊達宗城——河内

四、五年前に輕船製作を願出るも、土井大炊頭利位（天保十一弘化元年老中）によって不許可となる。

五、自藩内にも守旧の論あり、困難なこと。

六、琉球の仏艦一件につき、島津大隅守齊興と密話。

(2)

謹呈別紙

謹而奉呈寸簡候、然ハ先日被相下候御秘本拝見仕舞候ハ、奉返上候様、一昨日奉蒙 尊命奉恐縮候、此間警写卒業仕

候間返呈可仕奉存候処、無扨差急候俗事出来取紛れ、今日迄延滞何共奉恐入候、則謹而奉返璧候間、乍憚御照手奉願

候、実には御篇中之御立論御卓絶、且時勢御洞知被為在、当今之急務無此外、草奔小虫多に付恐入候儀候得共一々奉感

服候、朝暮奉盥談候事と重々難有仕合奉存候、如此 御忠奏御割切之御著扁御取用不被為在儀ハ乍恐扱々恐入候儀可

奉申上様無御座、自由ニ相成儀に候ハ、肥前守始一席有志之面々ニハ拝見為仕度事と奉存候、尤敝命も御座候間、如

何様の儀候共御沙汰不被為在候て、他人拝見不為仕候儀ハ無御座候、此段返上ニ付、乍憚御礼申上度奉呈別紙候、恐

惶謹言

仲秋九日

敬白、御秘本密借申重々入念大切に仕候処、誠に不調法仕、両所少々墨付出来仕、何共可奉申上候様無御座、千々

萬々奉恐入候、如何 御逆鱗被為在、奉蒙敝咎候共必機難遁儀ニ而、乍恐僕ハ賤軀ハ如何相成候とも不苦候得共、

御本墨付と相成候分本服候儀不相叶、御書物柄扱々奉恐縮候儀御座候、只々奉待 敝令候外無他事、不調法千萬奉

恐入候、此等の儀 御直可奉申上候ハ別而奉恐惶候得共、御秘本之儀白地に御側向申出候儀如何と奉存候間、乍失

敬御直ニ奉申上候、恐惶々々頓首額稽

内容 一、拝借の秘本返却。一昨日斉昭より催促があった（所見ナシ）。砲術等の蘭書であらう。

二、斉昭の上奏文について。この頃の斉昭の海防や建艦等についての、將軍家慶や、老中阿部正弘宛の書翰に意見書は『新伊勢物語』（『茨城県史料 幕末編Ⅰ』所収）に収められている。

三、拝借本筆写の際、墨付けたことの詫び。

七、弘化三年八月十一日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

\* 同前所収、但し、同前

『藍山公紀、卷九』所引

『大日本維新史料 第一編之二』五四九頁、弘化三年八月九日条所載

（返翰控）

朶雲披閱、炎爽不定、先以起居萬福拊賀々々、扱ハ縷々示諭并一冊令落手候、件々略答御海恕可給候也

八月十一日

浦安の国守ものは軍艦飛火の筒の外なかりけり（以下遠州殿  
御報迄朱書）「とのミ毎度存候、呵々」

「斉昭」

「遠州殿

御報」

内容 一、書翰六への返信、返却本一冊受領。

二、国守るものは、軍艦と大砲の他になしとの考えの確認。

斉昭は、受領した書簡の行間や末尾余白などに、それへの自分の返信の控を、時に朱書で書く習慣であったようである。彰考館所蔵の文書の中に実例が極めて多数ある。それを冊子に編集して写しとっていけば、このような形になる。

『藍山公紀、卷九』の弘化三年八月九日条は、「公之返上セラレシ秘冊二卷及謄写遊サレシ秘策ハ、其何書ナルヤ詳ナラス」との編者註記を入れている。

紙幅の都合で今回はこれにてとどめ、続稿を期す。

(附記) 私はかつて東京大学史料編纂所の維新史料部の、『井伊家史料』編纂や、幕末維新期の史料調査などの業務に携り、そこから水戸藩、宇和島藩等の政治史や、関係史料への関心を深めつつ現在に至っている。それ故に、本稿並びに今後予定している続稿のすべては、同所ならびに宇和島伊達文化保存会、水戸彰考館、茨城県歴史館等関係諸機関の多くの方がたのご指導とご援助によるものであり、心から感謝申しあげる次第である。

なお、これは「昭和五〇年度文部省科学研究費一般研究D、水戸藩史料による幕末政治史の研究」の成果の一部である。

(一九七六・九・十六)